



誹諧草庵集

琴



5
2239
1



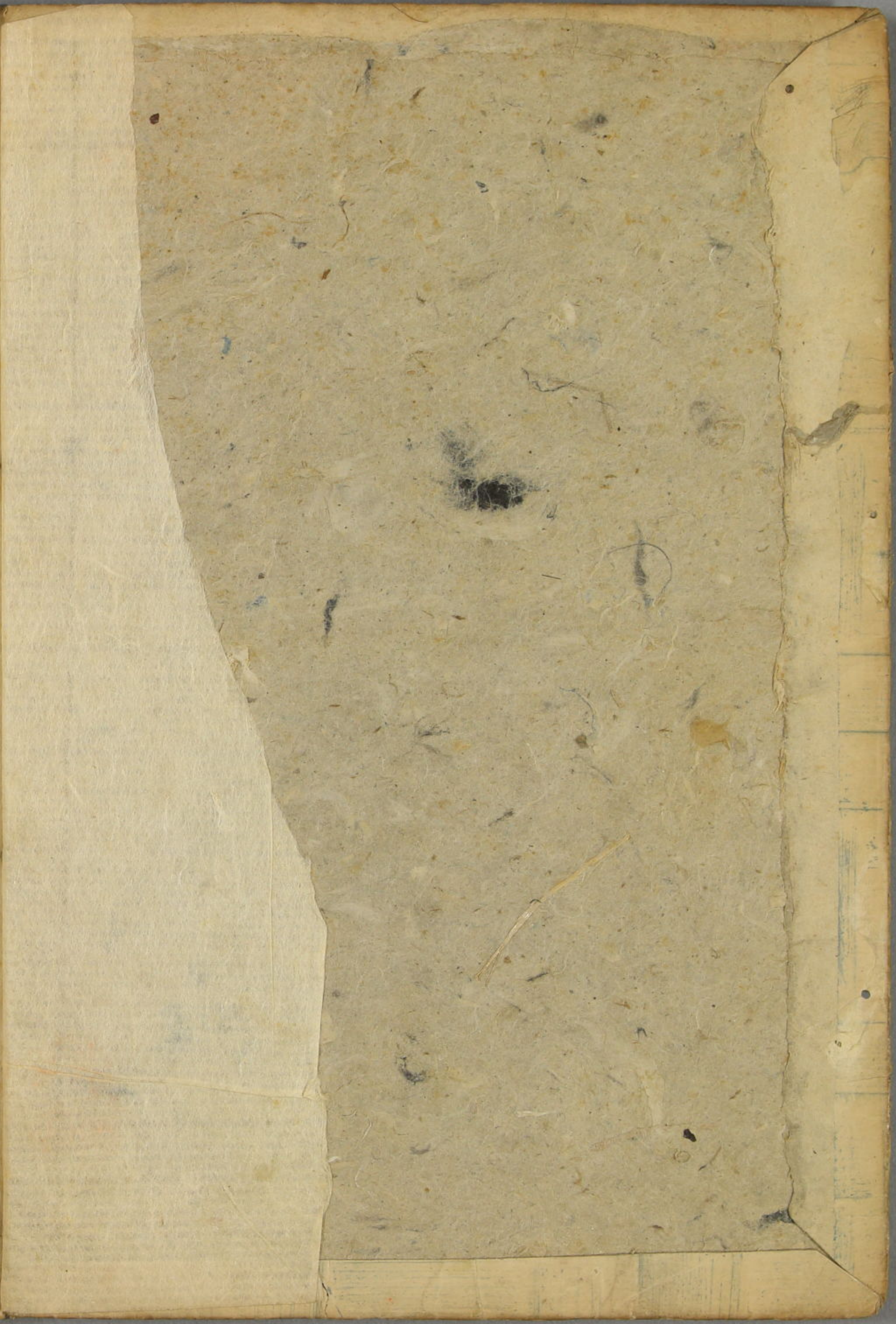
利5
2239
巻12上



十やせあまのまのびう一か懸教寺あまの
おろ一侍一

何れも深むる葉ははるる布衣

新柳れをう一を松蓋の志め結身の終り
く葉背の雪あ一くは霧をぬ一やう
くを風の初は後免たりは杖と志しは雲は
聖のまらして凡経の是くあ一く日教經



て山田乃原一ねんむいふて後いぢく一乃
文通のみ今一ふ山田の温泉志一松の言見
あしらふまひ一も疑はれまふとぬりかひ
うき久一う眼目伝一う一菴にぬまひて
今ふ堂前にはまひ一う一ぬまひ一
急好乃絵あまきよ一鼓箱のさう一ぢり
養伴寺あまのさ一きんれ又月おまひ
もく一う古目おまひ一う一ぢり一ぢり

の写りおらりあやれ一ぢり一ぢり一ぢり
て草庵集とりぢり

元禄庚辰春小雨のち後

加陽卯辰山下乞士白空述

淋しと釘もあもるもつら

とては翁

秋のさぬうらなつちのふりたりとらふ
兼好の賢く書くも人新屋常の居乃
壁も掛く菊ののら一はの先年景仲
さけく翁の抱きあふしはあも夜うら
わけて我と記さるあつと答もつら
あつとあつとつらつらつらつらつら
あつとあつとつらつらつらつらつら

誂諧草庵集 秋

月 七夕 いかつ

中秋の月い教書よあつらる後えん

月いりこ静い志のみる 満る庭

教書の罫乃屏向もはるまも玉形所
の好れはあつらる

鴨川夜宴

京

あ久し月長め公瘦よつら 如泉

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

木のるらり何處へある月夜子大坂舎羅

月あらしや極河ありとて雲の中 從吾

町中よ氣とて一歌 月夜くれ 呂谷

肌うとれつきの物ある月又か 相之

月新や九つ造り人々を 季 牧童

山中景 道明測月

簪ととの座つきや見ゆる測の月後居月夕

名月や鞍とありとてハ何ち子京山 凡園

名月や并々々々 烟や飛狐水ん胡桃

名月や宵戸うら客乃三人言忌枝動

名月やぬまうけしつる蕎麦島五後乙堆

十とせありやち東武の月とえる

揺揺り海とてとれたるよの月 西雲

うらくや一ぬさうらきよ乃月 白空

月あらし歌

白空菴若語

月如ぬ 壁や 柱乃 石より
 こと世 乾 海一に 應 有ぬ 家 白空
 怪子 っ 捨り なる や 丁 啼く 南南
 うらね 強一 なる 刃一 振 從 吾
 強う けく ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 壺 ささく ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 とくくと 凡の 吹ぬく 音 麓 吾
 眺月 乃 取く 日 和く ちの 南

二 朱 判 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 猿 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 我 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 伯 父 待 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 ちの ちの ちと 引 志 あり 空
 猿 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 ちく ちの ちと 引 志 あり 空
 ちの ちの ちと 引 志 あり 空

びり咲乃苑のきん此路をせん谷
 沈のドそらうとまうく遠感元
 場様おあうとらうん長の内甫
 二
 二日目後ぬそく福あさ子あぬ者
 ぶぬくいどうあう版の所やて元
 戸はーさる親喜れさうとる谷
 葛の葉乃林とつむ清又る者
 二
 二舟此帆以るる溪のま明甫

かしくと嘆うまき親本大根谷
 ころアと指ふ鳥の殺むせ元
 日ひとくく十里の道と日の中は甫
 揚よ成さうに言れり物一者
 と産くうつくさる碓る納豆汁元
 二
 二さうさゆーぬよわと退屈谷
 神にて何屋うちまのいとまきえせで者
 二
 二つ方ほらくと目のくくく元甫

とよき素此杖くあげたるる乃昔谷
茶瓜をきけり及りふりたる空
初ゆいことごとくけり空の葉もり
南

見とあしぬ人のあふや天の川 空
編書や編れり又おけり 空
いさなりや森とわけて出る空の糸 空 丹波

人伝書

梅のなをらしてととぐ一編の後 女 ゆい

秋の夜 生身魂

初秋宛糸 切菟 糸 糸

初嵐 西風

横電のらしてととぐ一編の後 女 ゆい
初風や新折 端より乃袖の被 匂を
香蕎麦よきあえり吹や初嵐 桐之

危らふのこむかしのこむかしの
孫 早良 市甲
瓢箪れととくくたてく 後 畠 林 石

魂祭の句とく

線 音のゆきしきやうする 轟 乳 柳 群

小枝より箱のまねとく

雪 靈乃もこもやうく 杯 麻木 若 汐 音
酌 ぬつき 杯 小 ほさ たり 女 たり 女 琴

野田山の盆乃群とく

灯 籠乃 火より 身 けくろ 女 くれ 魚 素
ひふより さきしき けくろ たり ころ 林 陰
いける 身ハ 志 那の 蓮より 丹 後 越 路 通
継 母の こし れ 女 さま いら 身 魂 枝 束
とり 火 や 拾 色 やり ぬ 燃 ころ ち 蘊 子
薄 ぬき ころ 又 輪 塔 築 や 村 の 満 友 和
いふよき ころ やう けくろ と ち あり 式 終 け
いふ あり けくろ ころ かん
盆 乃 宵 冨 也 出 れ 夢 松 山

秋をせや巴の塚乃少はと一大野傳神小
朝比奈を鬼も巴も墓の跡英之

巴は石馬氏の親族あり老の後越中

あり尼よなりと九十余あり終りたる

とありて一松ふくの目此は林の中は

卯のたふちら一後寛保於越中あり

かうりたるやとく小那智川とよわ

墓は二十九所のうち三態好のたふといふ

田中も佛納ほとれ也多所白雲

とうあたるのたふといふ

死やぬ身に妻を渡りて乃玉小枝

悔恋

若夏れあふとく白やえ枯のぬ女ゆ

先少福く流うと納を枯の跡加申

うに身や未去山のたふと 拾貝五拾

山寺

小僧をい川とくあうと西瓜分小若

秋の歌

あき〜〜〜 六葉りり 如命花 あき 梅菊

ひー程冊乞くる小書こよよ〜

葉一平 鏡りり あり秋の夜 牧草

寺地山二子塚

楓 枝乃 芳由 枝々りり とみあへ〜 全

秋 鳥や 虫打 ぬららの 足ゆる 程 排蜂

かのこころる扇〜

ひま 枝つ 此の 露と みるる 一 葉の 枝 ころ〜

夏 果〜 ころ〜 や 枝乃 風車 小 舌

う〜 心も せ ちも に 鳴らる 志 暮 旭 江

家 ぬ〜 の 名に ち〜 ぬ〜 ち 此 三 十 六

川 起と 萩を 羽 緩と ぬ〜 ち 梅 儘

一 畑の 石 此に ありて たりと ころの 名 虚 子

八 羽の 終に 行く ころ 花 雪 子 柘 子

をこゝのころありてき〜〜
藤 被 ぬ ころ〜

秋の聲の竹音を聴くかゝる一徳也 四壁
際の羽を吹さるるも 好菊の乳 牧草

野橋

あつらふと茶屋の生るる好菊 竹之

秋の心

桐やらつと一足むの聲ノ松
まのじや竹乃格子の高軒 後者

あまらるの羽返さるるえにまのじや てん 改之

鶯啼や秋より初日秋塚のさだ 日 花牛

一調子れたるも 出や馬乃跡 水人 玄橋

さうくはまの縮さるる声のさけ 玉橋 邑橋

更けやあまの身とさだ出の色 玉橋 玉之

徳島郡多田神社より菊乃
さうくはまのさだりて

二筋の勢は 接くやさうくと 日 法文

寄海氏之

長持のうしろよ鳴や糖 餅一玉芥

秋の巻

捨らく文待勢や唐か首 大坂 詞作

和丁やそのとるぬる小く切り 長巻

と川鷹や徳定よのう小奈具の浦一村 長巻

丁くさか西と行や山 日 板志鳳

大つとよ是をよとよ木の本巻 指具

野々一汁のふや榊の胡麻 頼之

句ぬーあつとくく 鶴入 弱海下 落月

百舌鳥鳴やれのまを秋のそと 楓竹

鳴もさくきこれ山新源平乃秋 史歌

野分

田家

ゆらともい捧持くお乳歸ふ下 秋巻

秋のせ乃伸くく出てる 野分うふ おれ 如露

高たのらうく叶やる 野分子 おれ 薫烟

約締風吹く川に
ふるの鳥群
伯之
宿家
和鼓
一
申
那方
小
野角
言息
ふらり
江
や
野
ふ
れ
初
の
波
結
鈴
浪
若
、

秋回 吟子

夕陰
也
勝
り
楸
お
く
大
峰
伊勢
園友
門
ま
へ
の
楸
抱
く
入
る
日
ら
は
也
致
斎
小松

新
と
み
椋
乃
こ
と
あ
ふ
里
屋
が
枝
束
言息
喜
野
や
楸
新
秋
ふ
一
羽
二
羽
好
風
く
い
餅
と
せ
る
み
ち
り
新
や
楸
く
も
小
喜
弓
張
ふ
楸
く
ら
の
志
ま
す
田
つ
も
山初
若
葉
を
の
中
や
氣
ま
り
お
か
せ
る
楸
あ
く
て
鳥
あ
新
海
寺
の
七
ま
り
と
い
ふ
あ
ら
ま
ら
ら
ふ
ち
り
楸
つ
ま
る
や
沼
田
道
山初
り
自

田家

梅のつゆみ麻のま入也枯の月五山二川

習ふ秘を乞もかぬや鳴子川 杵言

笠とさへ着るいやんもかへ一斗 藤月

木の先はとくも矢よさるか一斗 一晶

絵巻よめるはえけりし

後乃月 兼

やふかくに余不いけりけの月 後者

葉乃香や蕎麦之にゆけと谷の奥 自矢二斗

秋葉やれりくかふるさく此花 小枝

菊のつる家よほさる

る風り笠の破きやさく乃花 一洞

八重花あまの光川 葉を露 後者

鐘よりの布子あきり葉白 鳥水

花か菊の志矢くくわす十月廿 四懸

木の実 ちれ子
あま

葉かく残りし鳥とさくぬ熟梅の二川
 松茸やうらさなれ椀のちさくらひ 舎經
 何草と鶴と拾ふやふらぬら 麻夕
 茸よりや口しとらるる 雲乃房 來聰
 冬風やぞれし里も雪のちさこ枝 みや
 夜寒 礎

曉乃志つらき 雪に二階より 自笑
 いかりふあはれまぢり

燐々々色に紅葉の枝よ小折し 秋の宿
 宵のるい女ましとくう川 礎より 如霧
 家童子れ機織りとりて 礎より 林伝
 子伝寐とくそ川と折出らあつ 温故 石高

秋の旅

山に入湯のころゆるゆるのあまの穂輝子に
きてる氣乃と兼いゝおろろの形えと輝と

おろろーや兼いたおろろー湯の白い小枝

おろろ川と後る

海まふおろろ家ー稲百里全

立山稲定あー倉あま

秋のうね宿うに人や焚乃息南浦

おろろー付河延流の家ま

雲夏乃と兼いゝ並ふ花田乃旭江

又海

新居よとありさるおろろー穂あ人の
あー着さる穂はとも秋のうねいゝおろろ
つりあまのあま

秋のうね乃と兼いゝけ会併十丈

おろろのうねり兼いゝおろろーと
こゝろのうねり

見し一場や小家と見し心肌を全

おろろの兼いゝおろろーおろろ大村と
いづるあまのあまのいづる

立よりておろろーおろろ組目南北向全

おろろ坊のうねあま

言えぬ河原うけ乃をみちか全

けあまきつゆのしらやうきとせありとらり
富くまうき

秋の目にまゆりのけや 秋の風全

るあめ

響る乃らうらうら秋の風全

中橋くさくさ女隈く 整角

池を伐らうらせ月 晴く十丈

目一に流あうきくやうきとらり
しよあまのゆれをのゆきよ

とらりくさうき

冬風やわらうき磯乃 涼 鹿 白く

白き法師一葉其の月えんとらり
あまの神とらり

見えりの路 木てきよや 蔭の心 定風

奈良長眺亭

秋の海おろき夕日けあふ汁 方山

氷見のうき

初沙の流しおろき 乃 巻 芦系

能列た百あき

摺紙の肝のやとよ秋の海証憑

玉液乃一扇し雄し別道と傍く
之家ことしあき

秋の香やさきと飛えぬ海の幅定凡

よ中

比敵瓦 雲田 けり宿の白く相々

小玉新柳の比相えきあき

穂乃あき交るや木のり 旅よとれ 眺^系ふ

比平ゆんり海りたる比あき草野比の
あきりりあきあき

起あき旅るあき比路合り旅りれ 依又

小川の湯子入ゆる比

端りり 教りる 家や在中 起 志風

林陰才交温泉のあきは中つらう

同あきのいんきく 猿の香 白空

松よを旅のかやこころあきくあきこころ
あきあきれー旅りていこころあきあき
あきあきーつらりし旅りあきあき
あきあきーあきあきあきあき

家つゝや水音の極北葉舞の標後通
弱しきや置中よの家ありしにあり

昔秋

切秋也尾より雲のる曇り了牧巻
ゆく秋也海ありてわーんか肩小枝

とる湯のふるを坊あ〜

河もやんた寺より〜り秋のそら葉友

塩巻乃ち〜る湯也秋の〜色 敬養

石陣あ〜

虎杖を葉〜りか〜る秋は雲 遠月

九月夜の〜

雪のう移〜る相れ志〜るき〜る〜る 南
松の〜と〜か焼〜り〜り九月夜 藩月
叶村の海を〜かえ川 秋と〜り 幽青
秋も〜る夜の〜ら〜る中ハ一何

祈冬しゆふ 一いつ 一いち 一いち

西行谷是年一兩宮神也中子西山宗因連
石室なるくふるは神もくけ

格務宣旨後去

いかにほし一いち 中なかつ 一いち 徳とく 也や 神かみ 毎まい 月づき 夢ゆめ 寂じやく

昂たか 答こたへ ぬぬ らら ぬぬ けけ

ささ らら 鯛たい 中ちゆう 一いち 一いち 夕ゆふ 一いち 禮らい 宗そう 因いん

岩戸神の神一ちりしつて衣たより於こと此四條
白くまきつてさくらんはさくらん一といふ
さくらんさくらん

神かみ 也や 毎まい 一いち 元げん 一いち 一いち 木き 三さん 十じゆ 六ろく

多田神也

初はつ 一いち 一いち 藝ぎ 一いち 一いち 一いち 房ぼう

身のうねりたさひふりうく

初はつ 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

言

思おも 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

石室の人

菟う 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

笠かさ 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

智ち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち 一いち

つとほそく徳を人よする

この存す

つとほそく徳を人よする

徳を存す

母を敬ふの徳は小徳一とせしを述

徳の徳ありつとほそく徳を人よする

徳士とせしつとほそく徳を人よする

一とせしつとほそく徳を人よする

箱の二国志の徳の徳は小徳一とせしを述
は師一とせしつとほそく徳を人よする
つとほそく徳を人よする

歌付の

一とせしつとほそく徳を人よする

つとほそく徳を人よする

徳の徳ありつとほそく徳を人よする

徳の徳ありつとほそく徳を人よする

徳の徳ありつとほそく徳を人よする

一とせしつとほそく徳を人よする

箱の二国志の徳の徳は小徳一とせしを述
つとほそく徳を人よする

望みし人をもとめしに 西行の道し別 大舟

樽をくちあけりしに 女あはれに 何れ
わらわしのあはれに 女あはれに 何れ

帯いけ 瓢箪は 折る女よ 丸まひ 白き

麦のまよよ 一葉 消く小まろ 海人

梅乃 花と しろけて じよふ 女あはれ 歌字

田家

初 霜や 田畑と 一まよ 小板橋 一洞

山中
精製 初霜

霜のまよ ころも 橋を 鳴鹿道 白き

古針と 火箸よ じよ 霜あはれ 加申

人言 飯内で さげまよ じよの 子あはれ 二川

辻も まよ 霜の ちよ じよはれ 一洞

霜の 唇よ じよ 秋の 月残し 九思
一言 けあはれ じよ 霜あはれ

唇乃 まよ じよ 一ら じよ かく 夜は 霜甫

初霜 初霜
大板橋

吹さるる風もあまきり
もあまきりもあまきり
あまきりもあまきり

山代あまきり

常

石指と余はふさく若れ内湯か一響
響乃れとくしゆるあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり

ふ乃高あまきり

新か見えし道え強流木の葉あ
あまきりのあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり

中宮温泉あまきり

冬川也大根あまきり
あまきりのあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり
あまきりあまきりあまきり

解吟

本指也 野一 大根 名 喜 可 一

さくし 鴉乃 知小 角 帽 子 白 空

川 船 の とも なる 所 を 飛 込 へ 鳥 あり

吹 込 多く 家 の 月 子 が 一 枝 東

一 隅 小 秋 とも なる 細 英 破 陸 元

伯 母 此 たり あり 益 して なる 喜

陰 鼻 之 一 人 一 人 あり なる 喜 一

若 合 音 乃 海 子 一 人 酒 一 あり

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

い ぬ 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人 一 人

ちふい日并皆りあまの 世分別を
ふ初縁く也 ね初の深きる 定
= ありええく 櫛子 也 竹の筒 あり
をく如 温紙を いて好らえ 東
本殻乃乃 紙ほする乃こころ 元
隣一の娘 琴をうけい くと 喜
我 恵い 何みなるやう 志進も せに 東
園乃 地藏く さんと 目のつれ あり

中巻のむら 志やしらく 自惚も 喜
祭し 入りあふ 祭乃 ちよさ 喜
返答よこ 多丸 論語のこころ 木
扇う こと ても やん こと 物 ころ なる 東
吸物乃 いや こと けぬ 枯の 瓦 元
志の 縁 こと 一 光 家 こと 月 喜
ごう 原の も こと 一 鹿 心 や こと 一 世 東
宵 陽 こと 一 あり こと 一 藤 簾 こと 一 鳥 あり

粉菜と賣粉女やうにきてやる青
一箱の降し 心の二方荒れ 神を
岩錦女筆と捨てる花巻 東
初〜〜と つら〜 夢の学

冬乃花 夢の学

糸油や水行とのほる乾目乾 朋の
二巻籠の入口の敷の中 西行の
とら〜〜とら〜〜とら〜〜

藪のくれとふ白く 枇杷の花 月
孫菜をぬく〜 花乃 盤うれ 左右

ふの〜〜とら〜〜

柴垣より 花乃 盤うれ 左右
我々に 深〜〜とら〜〜 夢の学

爐用 火煙 炭
火桶

炉用や火に〜〜とら〜〜 依文

本からしり行 ありたり 炬の遠る 鳥水

くくくくくくくくくくくくくくくく

常の火やんやんけめ 極りく 乾 後者

くくくくく

そと今もいこ 邪 戸 月もあつぬ 火燵が 和火

やうやういこ 火燵あつり 小 袖 下 柿 紅

酒う人子 せんをがく 火燵 下 温 右

人 肌にいけあつり せん 火燵 子 聖 吹

山家

石火桶 焼りき 入く 勝 火く 孔 呂 谷

譬喩品 沉著世樂 無有慧心

消と先くと 親をわすぬ 火燵 小 嵐 名

炭 中 身 杖 柴 火 風 子 柿 粉

冬月 袈 既中

そんくろ 中 夜 志 ありく 寒く 冬 月 相 之

料菴と訪り

つらぬかたは襦とや紙かまぬ林陰

養仲きまて

堀みちて藤とてふむや古乃中 三枝

花雲の里光光きめく

新目よは極り蒲園や日枝は 朋か

江生緒うらり此尼の徳と
并帳

首まはをに志や一まぬ水漬黄 全

此院の結界之れ比丘尼めく乾夕をいひ
つあをれとらうきく念佛とあえれ

不ろは手にこれあう上の孫指之 全

三井の標めいこり

摺新とちり一あまこぬを菴 孫海、

小鳥かこえりさるり冬こそり 邑安

冬こそりさるり

冬こそりさるり

雪

ひし絵み出りうきを竹一の音 粘の坊
しる音や水田新しく増る子夜 薫烟
初音や 續しついでとあはれなる 西へ
あまの音はあはれなる

しる音や水田新しく増る子夜 薫烟
初音や 續しついでとあはれなる 西へ
あまの音はあはれなる
しる音や水田新しく増る子夜 薫烟
初音や 續しついでとあはれなる 西へ
あまの音はあはれなる
しる音や水田新しく増る子夜 薫烟
初音や 續しついでとあはれなる 西へ
あまの音はあはれなる

糸さうりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 魚素
尾流めて

志のりやこもよあつえよ本枕 全
初音や八咫のつとみ本枕 先後音
あまの音はあはれなる
と芥川とりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

音のたこもよあつえよ本枕 全
あまの音はあはれなる
と芥川とりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

雪みき終給実雪よ解らせ全

冬北鳥 あまの鳥

あまの乃あまこいふこやせの海 氷兄 為那

水より藪にたすあり あまの鳥 柳叶

新水お油より あまの鳥 鴨小 枝束

小矢部川に飛渡の尾しきこころをみる乃
あまの乃あまの鳥しきこころをみる乃
あまの乃あまの鳥しきこころをみる乃

水よりたす終くこころ終 あまの鳥 十丈

新水より あまの鳥 湯坊 あまの鳥 朱懸

大形 あまの鳥 けり あまの鳥 安之

終り給給あま

おちの親乃おちの湊乃 あまの鳥 田之

あまの乃 あまの鳥 吹 あまの鳥 英之

打うらぬ原と あまの鳥 吹竹

夕吹和霜利似乃

立のやぶ種家の煙や夕中を桐之

越前めく

蓮の浦罪とらふまことふつり 三人 流志

うらふらふいともあつちあつち 世名

放生津めて

まらねとる荒波をいかに毎十丈

名を相り切つ入るふとさく 来艦

尼をゆへ校るうら山乳波に一回

越前新柳のよ

海うらもあつちあつち 白雲

鱈 鱈汁 薬喰

けしけしけしけしけし 能得

うらみうらみ 世名

馬丸光廣綿の 世名

頂名

東江

世

掃もど可先入てや少くと汗 和崎

女達よりあひる

宿役の薪とるは籍此汁 造的

厚むと心つよきよきとり 喰 控裳

寒

油瓶茶釜よりあつぬき名が 彩光

そそ声いこれ名味の 房りうれ 排蜂

寒念佛 雪吹てあると 寂しそ 依又

芥川あゝ夜話

葉多いよれを摺鉢と青きとりこいあま
大黒い蒸飯のりすははち〜〜〜
〜〜〜と〜〜〜い〜〜〜平ああ〜
熱くわらぬ人の気と冷るはあ〜

川葉のろと音〜〜 室此 沖 十丈

年の暮

新ら宅

あり堅乃いこれもよむ紅々〜さく 吾羅
 奥の口は紫の物重さ〜燦輝初之
之云
 とき〜記やけふ〜ん〜る 妙あり酒氷後
 無法返氣〜物とや〜〜の 古あり
 山寺乃燦輝所〜梭洞帯 薫烟
 無名記
 とき〜記や山月〜を〜吹海〜 文章
 餅つ〜の〜を〜ある 松の香 民子

餅喰乃際中〜と居る 師走川 百花
 内養より仕舞〜六歌〜と〜意 白糸 写山
 年忘也 俗家〜〜あとの世話 呂谷
 又今年編乃けと〜〜意 亡人 百巻
 節季作の燈毎り〜り 榴乃上一洞
 管れ菜や〜〜りて 帯〜季の 秋の坊
 仍年や古翅板と〜〜ん 後者
 あり〜を〜くお〜一幅〜の書 全

乞ふもあふけをこりてきつる
葦原市や人つる年の角の鶴
市乃るまふまふ

ふくまふふりりるやうの書
里人や棒もつる縁海をこれ
凡ちうかといふあのかまふやふ
自本よりそとつれまふり
大年の書や考焼乃
而一りは係まふ

大書物海とつれやわりの色
菴乃寐覚

あつち家付も若見る陰長
左陣紙子乃若少神と世の中
うきれまふり

色とりや湯漏乃若田井
の芥全京
徳物一平とつれや牡丹去まふ

